

ダイテス領攻防記 3



トウール

「無敗王」と呼ばれる
西の国
エテルの王。

ゲイン

「強欲王」と呼ばれる
東の国
カイナンの王。

ナリス

「虐殺人形」と呼ばれる
南の国
ハヤサの王。

トウザ

南の国ハヤサの
王太子。

ケイシ

西の小国
カガノから来た
青年。

ジュリアス

オウミ王国の
王太子。

キリム


「強欲王」ゲインの
庶子。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
廃嫡されて、ダイテスに
婿養子としてやって来た。
「黒の魔将軍」と
恐れられている。

ミリアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵令嬢。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。



水谷美有

お嬢女子人生を謳歌していたOL。
事故で命を落とし、
ミリアーナとして転生。

登場人物紹介

目次

ダイテス領攻防記 3

日本の心

253

7

ダイテス領攻防記 3

プロローグ それはあるはずのないもの

ミリアーナが運転する車は、道なき道を通って走っていた。

ダイテスの密偵であるカズルのバイクの先導とセイの護衛で、裏道を駆ける。カズルが『幻』を飛ばして斥候しているの、目撃される恐れはない。獣道のような道を走っているため、車体は何度もはねた。四輪駆動でなければ、走り抜けられないだろう。

一行はオウミの西南にあるランカナのニールンから脱出し、オウミ王都を目指していた。ニールンとは、オウミに細長く食い込むランカナの領土だ。

このあたりは貿易業が盛んで、ニールンからオウミへと続く道は比較的整備されている。しかし、拉致されたオウミの王太子ジュリアスを取り戻すため城ひとつぶち壊した一行は、正規の街道を通るわけにいかない。元王太子であるミリアーナの夫マティサとその弟である現王太子、南の隣国ハヤサの王太子、そして東の隣国カイナン王の庶子——彼らは、そろいもそろって人目を引く容姿をしているのだ。誰かに見られれば、覚えられてしまう。

自動車やバイクという、この世界にあるはずのないものを見られるのもまずい。

ミリアーナがルームミラー越しに後部座席をうかがえば、マティサとカイナンからの客人である

キリムは、城ひとつ綺麗に更地にした反動で眠っている。二人に挟まれたマティサの弟ジュリアスも、疲労のせいか眠っていた。マティサは凛々しくジュリアスは可憐だが、兄弟だけあって華やかな容姿の造作はよく似ている。キリムも顔立ちは整っており、この三人が一塊になって寝息を立てている姿は、腐女子であるミリアーナにとって眼福だった。

(萌えっ!!)

思わずアクセルを踏み込んでしまうのも仕方ない。

後部座席の面々が眠っていたのは幸いだった。そうでなければ、確実に車酔いをしていただろう。(それに比べて——)

ミリアーナは助手席に座るトウザをちらりと見た。ハヤサの王太子は、顔色ひとつ変えていない。

「大丈夫ですか？」

「あん？ 揺れのことか？ こんなもんは時化ん時の船に比べりゃ、どうってことないさ」

「海の男なんですね」

ハヤサは海洋国である。船乗りでもあるハヤサの王太子は、揺れに強いらしい。

大陸中央の大国オウミ王国は、北を竜骨と呼ばれる山脈にさえぎられている。竜骨の途切れる東にはカイナン王国があり、西にはエチル王国がある。どちらも王級「加護持ち」の王をいたたく大国だ。そして南にはハヤサ。ハヤサは規模こそ中堅国だが二人の王級「加護持ち」を擁し、戦力だけなら大国に勝るとも劣らない。

三方を強国に囲まれたオウミ。これがチェスや将棋ならば、すでに詰んでいるところだ。しかし、現実には打てる手がいくらでもあった。南のハヤサとは同盟を結び、恩を売っておく。西のエチルの『無敗王』トゥールは慈悲深い王であり、こちらから手を出さなければ襲ってくることはない。

唯一の脅威となる東のカインンには、対抗できる人材を配置して凌ぎ、現状維持に徹する。それが崩れたのは、カインンの『強欲王』ゲインに對抗できる人材——王太子であった王級「加護持ち」のマティサが廃嫡されたためである。

この世界には、魔力があふれている。

何も無いところで火が燃え続けたり、ある一点から風が吹き続けたり——このようなありえない現象が起きれば、それは精霊の仕業とされていた。そして人知の及ばない不可思議な現象が起きる場所には、必ず魔力が溜まっている。魔力はものにも宿り、人々は、精霊のごとき現象を引き起こす石を精霊石と呼んだ。

また魔力は人にも宿り、これを持つ人間を「加護持ち」という。魔力が精神に宿れば魔法という不思議な操ることができ、肉体に宿れば驚異的な身体能力を発揮する。

カインンの『強欲王』ゲイン、エチルの『無敗王』トゥール、ハヤサの『虐殺人形』ナリス、『ハヤサの鬼』トウザ、オウミの『戦神の寵児』マティサ——いずれも強力な「加護持ち」だ。

「加護持ち」は崇拜されることもある。恐れられることもある。

マティサの実母リサーナはマティサを忌み嫌い、もう一人の息子ジュリアスを王太子にすべく、オウミの西と南の有力な貴族を味方につけてマティサを廃嫡に追い込んだ。ユティアス王は一時マティサを権力から遠ざけるため、力のない辺境の公爵家へ婿養子に出した。

選ばれた辺境の公爵家——それこそミリアーナの生家であるダイテスだったのは、なんの運命のいたずらか。

ミリアーナは普通の人間ではない。前世の記憶を持っている。

彼女の前世での名は、水谷美有。この世界とは別の世界、日本という国で生まれ育った人間だった。

前にいた世界は、現在より文明が数百年ほど進んでいた。ミリアーナにとって、今の世界は中世ヨーロッパのようなものだ。

あまりの差に衝撃を受け、ミリアーナは前世の知識を利用して、生活改善のためにダイテスを発展させた。

前世の世界から程遠いとはいえ、それなりに発展したダイテスにマティサがやってきたのだ。

ダイテスの技術とミリアーナの知識は、使い方によっては世界を変える。あまりにも強力なカードだ。

今のところマティサは、そのカードを切らずに隠し持っている。もっともマティサ自身が切り札のような存在なので、それには及ばないだけのことだろう。

マティサを廃嫡に追い込んだ王妃や、その取り巻きである西と南の領主は、愚かなことに西の

『無敗王』に手を出した。

元王太子であるマティサの功績に対抗すべく、エチルへの遠征を強行したのだ。

エチルの王トウルは、その二つ名のとおり無敗。遠征軍は容赦なく打ち負かされ、オウミは戦力を著しく落とした。

軍事力のバランスが崩れ、窮地に陥ったオウミ。その状況を五分まで押し返したのは、マティサの能力によるところが大きい。

エチルと和解し、これ幸いとちよつかいをかけてきたカイン軍を蹴散らした。

政治的にも軍事的にも、『戦神の寵児』マティサは実力充分であった。

「でも、状況次第では厄介なことになりそうね」

思わず呟いたミリアーナに、トウザが突っ込んだ。

「そりゃあ、そうだろ？ 隣国が強くなるのを喜ぶ国なんざ、あるわけねえ」

「トウザ殿下、不吉なこと言わないでくれますか？」

オウミは、エチルとカインとの三国同盟を結んだ。

これには裏でダイテスが大きくかかわっている。両国へ密使を送り、トウル王の発案ということにして、同盟の話をおウミに持ちかけてもらったのだ。カインへもエチルへも、その代償を渡している。

大幅に戦力の下がったオウミのことを考えての苦肉の策ではあったが、王級“加護持ち”を擁する三国が結びつけば、他国には脅威に映る。警戒心を抱かない国などない。いつ自国に牙を剥くか

もしれないという疑心暗鬼に陥る。

ランカナの『オウミ王太子誘拐』という暴挙も、この同盟が原因だろう。

マティサはかつてランカナのダイアナ王女と婚約していた。しかしマティサが廃嫡されると同時に、ランカナ側から婚約を破棄。その後、新王太子であるジュリアスにダイアナ王女との縁談を申し込んだ。

一度は手放したオウミとの繋がりを持つとするとするのは、オウミが立ち直ると踏んだからだろう。そうなれば、婚約破棄したランカナはオウミから敵視される。それを回避してオウミと誼を結ぶには、新王太子と自国の姫の婚姻が手っ取り早い。とはいえ、虫のいいこの話は王妃の怒りを買って拒否された。

王太子誘拐は、追いつめられたランカナの強政策だったに違いない。

オウミは、ジュリアスの身柄を一度は押さえられた。

ダイテスの密偵『亡国のカズル』と『早風のセイ』の能力、そしてオーバーテクノロジーの力がなければ、これほど短時間で王太子を奪還できなかっただろう。

その一方、マティサとゲインの庶子キリムがキレたことで、ニーレンの城が崩壊するという派手な事態にもなった。

肉体に魔力を持つ“加護持ち”の中でも王級の力を持つ者は、『キレた』と言われる暴走状態に陥ることがある。マティサとキリムは、ランカナの宰相の所業にそろってキレた。その結果が城の崩壊である。とんでもない破壊力の反動で、今は“活力切れ”の状態だ。

一騎当千^{いっきとうせん}という言葉があるが、それ以上ではないだろうか。

各国が警戒するはずである。また加護持ちの獲得に奔走^{ほんそう}するのも無理はない。

「覚悟したほうがいいぜ。あいつは辺境でのんびりできるタマじゃねえ」

「あう、否定できない。王級[〃]加護持ち[〃]、恐っ!!」

トウザの言葉に、ミリアーナは泣いた。



一行を乗せた車は、密かにオウミの王都に舞い戻った。表の街道を避けて裏道を通り、王都の端のダイテス公爵家が所有する屋敷の裏手で停まる。

「どうした？」

ミリアーナは複雑な顔をして、助手席のトウザを見た。

「どうしたものかしら……」

表から堂々と入れない。ジュリアスやキリム、マティサは今ここにいるはずがないのだから。

王侯貴族の城や屋敷には抜け道があり、もちろんこの屋敷にもある。そこから入るのが得策なのだが、それはいざという時のためのもので、隣国の王太子といった部外者に見せられるものではない。

ミリアーナが考え込んでいると、バイクから降りたカズルが車に近寄り、トウザに向かって話し

かけた。

「申し訳ありませぬが、小細工^{こざいく}をさせていただきます」

トウザは眉をひそめる。

「何を？」

ダイテスの密偵カズル・ツナガは精神の[〃]加護持ち[〃]——すなわち魔術師でもある。物理的な影響を与えることはできないが、幻を作つて己^{おの}が目と耳として使役したり、人の認識を阻害したりできるのだ。

「少しばかり見られては困るものがございますね」

「ああ、抜け道か。そりゃ仕方ねえな」

トウザは素直にカズルの術を受け入れた。

「迷惑をおかけいたしますが、何、抜け道を通る間だけでございますよ」

その間に、セイは隠してあった抜け道の出入り口を開けた。

カズルは、ミリアーナに向かって言う。

「もう入口がわからないはずでございます」

「助かるわ」

カズルとセイはバイクに戻り、ミリアーナは車を発進させた。

すぐにトウザが尋ねる。

「……お嬢ちゃん。もしかして、これ、今動いてるか？」

「動かしていますけど？」

「うわ……体感も誤魔化してんのか？ 全然わかんねえぞ、これ」

トウザは顔をひきつらせた。

「自分が動いてるってわからねえ。まわりは見えてんのに、特に変わってるって感じもねえ。あらかじめ聞いてなきや、本当にわかんねえぞ」

船乗りでもあるトウザの方向感覚は、優れている。そのトウザの感覚さえも、カズルの魔法は攪乱していた。

「……本当に、便利な能力だわ」

実のところ物理的な影響を与えられないカズルのような魔術師は、この世界で軽視されていた。

ミリアーナがいた前世の世界では、魔術師というと火の玉を撃ち出したり、風を起こしたりできる印象が強い。

しかし精神に加護を持つ者は、王級に準じる加護があつてはじめて、物理的な力を発揮できる。

それでも小さな火を起こしたり、微風を生んだりする程度のものだ。そして王級になると、ようやく物語やファンタジーRPGの魔法使いに匹敵する。

肉体に加護を持つ者と同様、精神に加護を持つ者も少ない。王級の“加護持ち”は、一国に一人いるかどうかだ。

そのため強さがわかりやすい肉体に加護を持つ者が重宝され、魔術師はあまり重要視されてこなかった。

しかし、カズルの魔法は使い方によっては本当に役に立つ。発想の勝利であろう。

もともとダイテスにおける魔術師の地位は、他の地域に比べると高い。これは、ミリアーナが早くから魔術師の有効な利用法を考えていたからだ。

虜囚に入れる呪式、ダイテスを支える魔法道具の開発に、魔術師の存在は欠かせない。

空气中に漂う魔力を感じできるという彼らの能力は、ダイテスの動力を担う精霊石の発掘にも生かされている。

たとえ物理的な影響を与える能力がなくとも、ダイテスには充分仕事がある。

カズルはダイテスに仕えるまで、主を持たずに裏で仕事を請け負う密偵として能力を生かしてきた。その能力と知識、経験は貴重である。

ミリアーナは改めてカズルの能力の便利さを実感しながら、秘密の抜け道を通って屋敷に入った。

抜け道は、バイクや自動車を隠しておく地下の車庫に繋がっている。そこにはマティサの腹心であるコシスをはじめ、家臣や侍女たちが集まっていた。

ミリアーナは所定の位置に車を停める。

「出迎えご苦労様」

ミリアーナが顔を出すと、コシスが駆け寄ってきた。

「お方様、我が君は？」

銀髪の美しい腹心が心配するのは、まず自分の主君のことだった。

「婿様は『活力切れ』よ。後部座席で寝てるわ」

「加護持ち」が暴走状態に陥ると、衝動に任せてあたりを破壊しつくす。その後、力を使い果たして『活力切れ』になれば、魔力、体力が回復するまでは動くことすら辛いらしい。

「マティサとキリムは『活力切れ』で寝ている。」

「ミリアーナより遅く寝て早く起きるマティサの寝顔は、とても貴重だった。いつも研ぎ澄まされた刃のような鋭い雰囲気をもとうマティサが、無防備な顔を晒している。そうしていると、造作の良さがよくわかる。」

「相変わらず主君第一かよ」

「コシスを見てトウザが苦笑した。」

「ご助力、感謝いたします」

「コシスはトウザに頭を下げる。今回の事態について、ある程度の報告はすでに無線ですませている。」

「マティサがキレて指揮が執れなくなつたあと、迅速に一同を退かせたのはトウザである。また行きがかり上、ジュリアスを救助したのも彼だった。」

「よせやい。俺がこいつを助けんのは当たり前だ」

「トウザはマティサに対して、友情だけでなく恩も感じている。」

「五年前まで、ハヤサはモグワールという国の一豪族だった。」

「元はモグワール王族であるトウザの父ナリスは、ハヤサへ婿入りした人間である。何もなければ、

大人しくモグワールに仕えていただろう。」

「しかし、モグワールが代替わりしてナリスの長兄が王になった途端、彼は何を考えたのか、ナリスの妻で『ハヤサの鬼姫』と呼ばれるオクタヴィアを謀殺。これを知つたハヤサは、反旗を翻して主家を攻め滅ぼした。」

「この時、オウミはモグワールを見捨て、一豪族でしかなかったハヤサと同盟を結んだ。これによりハヤサは、オウミがモグワールに助力する心配もなくモグワールと戦えたのである。」

「この同盟を結んだ時の使者は、マティサとトウザだった。」

「ハヤサは、交易など多方面においてオウミに便宜を図っているが、それと個人の恩義はまた別である。」

「客室を用意いたしております。少しお休みになられてはいかがでしょう？」

「コシスの申し出にトウザは頷いた。」

「おう、そうさせてもらうぜ」

「王級『加護持ち』のトウザは、一晩ぐらい寝なくてもどうということはない。とはいえ、こうした心遣いを無下にするのはよくない。ありがたく受け取っておくのが礼儀である。」

「すでに取り計らつてあつたのか、黒髪の侍女が進み出て優雅に一礼した。」

「グレイスと申します。殿下のお世話を仰せつかりました。お部屋へご案内いたします」

「グレイスの挨拶のあと、コシスはミリアーナに提案する。」

「ジュリアス王太子殿下とカインナの御子様もお疲れの様子。客室でお休みいただいでは？」

「コススがそう言うってことは、もう用意させてあるんでしょう？ いい判断だわ。起こさないように運んであげて。婿様は自分の部屋でいいわよね」

「はい。失礼いたします」

コススはそう言うと、後部座席で眠るマティサの顔を覗き込んだ。

「我が君……」

マティサを起こさぬように、小さく呟くコスス。

少しやつれて無防備に眠るマティサを、労りつつ抱き上げる。コススの水色の瞳には、抑えても抑えきれない不安がにじんでいた。

(はうろうう！ この絵(え)面(づら)は！)

ミリアーナは衝撃を受ける。

思えば、コススが無防備なマティサを他人の手に委ねるはずがないのだ。主に何かあれば、命を懸けて守るのが従者というもの。

(萌え殺す気か！ 至福！ 至福の光景だわ！)

気を抜けば緩んでしまう顔を、ミリアーナは必死に引き締めた。

「どうかなさいましたか？」

コススがミリアーナに尋ねる。

「いえ、ありがとうコスス。よくやってくれたわ」

いろいろな意味で。



「当然のことでございます」

「婿様、重くない？」

「お方様、わたしは“加護持ち”でございます。トリスでも、片手で持ち上げられます」

トリスはコシスの異母弟である。コシスよりもはるかに長身で横幅もある。はつきり言つて熊だ。それを片手で持ち上げられると言われ、ミリアーナは驚いた。

「そういえば、そうだったわね」

コシスは軽い“加護持ち”だ。見かけによらず、かなりの力がある。

「コシスが人並み外れた力を出したところって、見たことないもの」

コシスは参謀として優れた手腕を見せるものの、身体的な能力をミリアーナに見せたことはない。そのためつい忘れがちになるが、彼は『銀の守り刀』の異名を持つ武人なのだ。

「さようでございますか？ 日常ではそれほど無茶なことはいたしませんので、そう見えるのでございましょう」

コシスはそう締めくくった。

「そんなじゃあ、こいつは俺が運んでやるよ」

トウザがキリムを抱き上げた。

野性的な顔立ちで大柄なトウザが、やはり大柄な赤い髪の若者を軽々と抱き上げている――

(この組み合わせも、これはこれであり！)

ミリアーナは心の中で快哉を叫んだ。

「客人にそのようなことをさせるわけには――」

慌てるコシスに、トウザは気にするなど笑う。

「こいつはどこに運ばいいんだ？」

「では、こちらにお願いします」

切り替えの早いグレイスがトウザを誘導する。

ジュリアスは、兵士の一人が抱き上げて連れていった。

溜息をついたコシスは、マティサを抱いたまま車庫を出ていく。

「有意義な時間だったわ……」

ミリアーナは満足して呟いた。

(いいもん、いっぱい見させてもらいました)

「お嬢様、大事ございませんか？」

クラリサがミリアーナに駆け寄った。

「お迎えありがとう。クラリサはちゃんと寝た？」

クラリサは眉を寄せる。

「はい。コシス様が無理にでも休むようにとおっしゃられて……ご本人は寝ておりませんが、不公平ですわ」

コシスは、夜会から戻ったあと一睡もしていない。しかしまわりの人間には、交代で休憩を取らせていたという。

「本当に有能よね、コシス。まあ、休める時に休んでおかないと役に立たないし——コシスはあれで“加護持ち”だもの。私たちと一緒にしちゃ、だめなんでしょうね」

王級“加護持ち”の中には、七日七晩不眠不休で戦場に立ち続けた者もいるという。そこまではいかにしる、多少の負担はなんでもないのである。

「お嬢様、何か召し上がりますか？ 夜会以降、食べていらっしやらないのでは？」

「そうね。軽く食べてからお風呂に入って、ちよつと寝るわ。さすがに疲れたもの」

「ミリアーナはクラリサの助言に従った。」

「さすがに空腹だったし、眠気もある。休める時に休むべきだろう。」

「ミリアーナは溜息をついた。」

トウザは、案内された部屋の寝台にキリムを下ろした。

「ありがとうございます。あとはこちらでいたしますので、殿下はお部屋のほうへ」

「そうかい」

キリムにつけられた侍女なのか、グレイスではない金髪の侍女がそつとキリムの靴を脱がせた。

「起きませんね」

「起きるわけねえぜ。“活力切れ”で寝てんだ。まず昼までは目が覚めねえ」

トウザもキレたことはある。最後にキレたのは、五年前。モグワールとの戦の時だ。

出城のひとつを落としたあと、捕虜にした父方の従兄の一人が亡き母を冒瀆するような言葉を吐いた。戦闘後の気の高ぶりと怒りが相まって、キレたらしい。

目の前が真っ赤になり——気がつけば瓦礫の中にいた。一部損傷しながらもそびえ立っていた城はなくなっており、ひどい疲労感と脱力感があつた。トウザはそのまま倒れそうになったところを、ナリスに抱きとめられた。

「そなたは優しい子じやのう、トウザ。苦しませず、一瞬で首をもぎ取るとは。我ならば生まれてきたことを後悔させてやったものを。休むがよい。あとは我が始末するゆえに」

父の言葉を聞きつつ、トウザは気を失った。

そして六、七時間眠り、やっと目が覚めた。

腹心のソウマに聞いたところ、トウザは従兄の首を片手でもぎ取って、六時間ほど暴れ続けたという。城を瓦礫に変えたのもトウザなのだそうだ。

トウザは何も覚えていない。

ソウマたちは遠巻きにするしかなかったが、ナリスは“活力切れ”になる頃合いを見計らってトウザを回収した。同じ王級“加護持ち”だからこそ、できたことだ。

トウザは、寝台の上で眠るキリムの顔を眺めた。

キリムはトウザの上の弟と同じ年である。似ているわけではないが、気にはなる。

(損な性分だけ)

長男気質とでも言うべきだろうか。弟みたいな者がいると、構いたくなる。

トウザは頭を掻いた。

キリムの部屋からほど近い場所に、トウザのために用意された部屋があった。

「こちらの部屋でお休みください。その前に、湯あみをなさいますか？ お食事もご用意できま
すが」

「あん？ 湯あみの用意もしてあったのか？ そんなじゃあ、先にすましちまうか」

湯あみ——沐浴の準備には、大変な労力がかかる。

水は、井戸や池、川から汲んでくる。水汲みは重労働である。バケツや桶一杯の水でも、それなりに重い。浴槽を満たすぐらいの水を確保するには、何度も水場まで往復しなければならぬ。一度に汲める量ではないのだ。湯を沸かすにも大量の薪がある。拾うにしろ買うにしろ大変だ。

その場で沸かせる仕組みの風呂もあるが、個室で湯あみをする場合には、沸かした湯を運んでくるのが普通だ。

湯が冷めてしまつては、心遣い無駄にしてしまう。湯が温かいうちに沐浴をすませてしまふべきだろう。

「では、こちらに」

グレイスは、室内の扉のひとつを開ける。

そこには、浴槽が置かれていた。浴槽の上には金属でできた筒のようなものが二つあり、それぞれ赤と青の印がついている。浴槽は湯で満たされ、湯気が立っていた。

「少し冷めたようです。湯を足しておきます」

「少しぐらい構わねえぞ。今から湯を用意すんのは大変じゃねえ——」

トウザは言いかけて、固まる。グレイスが赤い印のついた筒の上の金属片をいじると、筒先から湯気の立つ湯が出てきたのだ。

「なんだ、そりゃあ！」

屋敷には、トウザの悲鳴のような声が響きわたった。

第一章 ダイテスという秘密

カイナンの『強欲王』ゲインの庶子^{しよし}、キリム・ナダは見知らぬ部屋で目が覚めた。「……ここはどこでござろう?」

少なくともカイナンの自分の屋敷ではない。オウミで購入した屋敷でもない。

品よくまとめられた、瀟洒^{しやうしや}な調度類。金はかかっているみたいだが、居心地のよさを優先させたようなセンスがあった。

すでに日が高いのか、室内は明るい。

疲れのせいでぼんやりした頭だと、思考がまとまらない。

「お目覚めですかあ〜」

その時、のんびりした声がかげられた。声のしたほうを向けば、金髪碧眼の可愛い女が立っていた。

「どなたでございますか?」

「キアラと申します。キリム様のお、お世話を言いつけられましたのでえ、なんでもお言いつけください。それからあ、ここはオウミの王都のはずれのお、ダイテス公爵家の屋敷でございませす」

キアラと名乗った侍女は、ぺこりと頭を下げた。

「これはどうもご丁寧」

キリムも頭を下げる。

そして昨晚——夜明けまでの出来事を思い出した。

「あ——マティサ殿の屋敷でございましたか!」

「はい。一度こちらで身支度^{みしだく}を整えられたほうがよろしいと、主様方^{あうるじさま}が思われたようです。湯あみと着替えをなさいましたらあ、お食事をお話があるそうです」

「これはどうもご丁寧」

キリムは再び頭を下げた。

ふと寝具が目に入り、キリムは慌てふためいた。

「あ、申し訳ございませぬ。寝具をこのように汚してしまつて」

城をぶち壊したあと、ダイテスの魔法道具だという自動車の中で眠ってしまったキリムは、そのまま寝台に運ばれたようだった。塵芥^{じんがい}を浴びたまま眠っていたので、手触りの良い寝具を汚してしまつた。

均一で丁寧^{かたよ}に織られた綿である。糸からして偏りのないものだ。糸車の操作で少しでももたつけば、糸はすぐだまになつたり、太さがまばらになつたりする。ここまで綺麗に糸の太さをそろえるのは、並大抵の技術ではない。

布を織るにも時間がかかる。これほど編み目を均一にできるのは、熟練の職人^{わざ}の技によるものだ

ろう。

綿とはいえ、こんなに品質が良ければ高級品に違いない。

「気になさらないでください。汚れることがわかっていましたから、汚れてもいいものを使っています。洗えばすみますし、替えはいくらでもありますからあ」

「は？」

侍女の言葉に、キリムは目をむいた。

いくらでも替えがある？

そういえば、ダイテスは公爵家である。

「ダイテス家は裕福なのですか」

キリムの言葉にキアラは首をかしげた。

「ダイテスが豊かなのは否定しませんけどお、何か誤解しておられます。ダイテスではあ、一般的に普及している品物ですのう」

「は？」

目を瞬かせるキリムに、キアラはたたまった衣服を差し出す。それは見覚えのあるものだった。

「お着替えでございませう。お城の方に、おうちの方から送られた服を、こちらにまわしてもらったそうです。湯あみの用意をいたしますので、あとでお召し替えください」

「これは、かたじけない」

キリムは頭を下げる。

着ていた礼服は、ボタンを引き千切った上に思い切り暴れたため、ぼろぼろで使いものにならなくなっていた。前の合わせは開き、胸と腹がむき出しだ。

「お見苦しいものを」

キリムは今さらながら恥ずかしくなった。

「いいえ、見苦しくなんかありません。むしろ、き……いいえ、なんでもないですう」

キアラはぶんぶんと首を横に振った。眠っているキリムの顔や露出していた肌を濡れた布で拭き、綺麗にしたのは彼女である。

その間、キリムを鑑賞して役得だと思っていたことは秘密だ。

キアラは、室内の扉のひとつを開けた。

「こちらが浴室でございませう。すぐに支度いたしますのでえ、お待ちください」

キアラはそう言うと、蛇口をひねって浴槽に水と湯を溜めはじめた。

「ふえっ！」

キリムはその光景に目を疑う。

「それから、廁ですが、そちらの扉になりますう」

「か、廁でございませうか」

通常、建物の中にある廁とは、個室におまるなどが置かれているだけのものだ。そうでなければ、外に別に作る。とはいえ、こちらも地面に穴を掘ってまわりを塀で囲った程度の建物で、手を洗うための水がめが置いてあるだけだ。

キアラは扉を開いた。そこには作り付けの陶製らしき便器があった。

「ここでなさって、このレバーを動かしますと水が流れますう」

キアラがレバーを動かすと水が出てきて、便器の中をいったん満たしながら、管を通って出ていく。

「こちらが手水ですう。ここをひねると蛇口から水が出ますのでえ、手を洗ってくださいあい」

キアラは、さらに別の陶器に付いている金属片をいじる。すると、そこからも水が出た。

「それは、ありがとうございますか！」

屋敷にキリムの悲鳴が響きわたった。



すでに昼を過ぎていたが、全員が身支度を整えるまでに少々時間がかかった。

中庭で、ミリアーナとマティサ、ジュリアス、キリム、トウザは食卓に着いた。傍らにはコシスが控えている。

用意された食事はなかなか豪華で、ミリアーナ以外は旺盛な食欲を見せた。

ジュリアスはともかく、マティサとキリムは若い男という点を差し引いても切羽詰まったものがある。片っ端から料理を平らげ、それでもまだ足りないようだった。

「申し訳ございませぬ、あつかましいところを。しかし、腹が減って、どうにも」

さすがにキリムは、真つ赤な顔をして弁解した。

「仕方ない、キレたあとだ。腹も減る。遠慮なく食え」

涼しい顔をしたマティサが新しい料理の皿を取りながら言う。

「そういうものなんですか？」

ミリアーナが聞くと、トウザが答えた。

「おおよ、活力切れのあと目が覚めると、腹が減って死ぬかと思うぜ」

トウザは単によく食べるだけだった。

「お言葉に甘えまして」

キリムは一礼し、再び料理をばくつく。

「キリム君、王級 加護持ち」だったのね」

「そのようでございますな」

ミリアーナの問いかけに、キリムは不明瞭な返事をした。

「え？ 何それ、もっと詳しく」

ミリアーナが身を乗り出すと、キリムは困ったような表情を浮かべる。

「詳しくと申されても——自分、人より力も強く、疲れたことなどございませぬので、加護持ち かもしれぬと漠然と思っておりましたが、よもや王級などとは思ってもよらず——」

「無茶を言うな、嫁。王級 加護持ち」でも、最初は自覚がないのが普通だぞ」

助け舟を出したのはマティサだった。

「そうなんですか!」

「ああ。精神の“加護持ち”の魔術師ならともかく、肉体に加護を持つ者は自覚がない。やってみたらできたという感じで、よほどの無茶をしてみないとわからないものなんだ」

王級“加護持ち”として名高いマティサの言である。信憑性があった。

「王級でも、戦場に出て無理をせざるを得ない状態になって初めてそうだとわかる例が多い。ハヤサのナリス王やエチルのトゥール王がそうだったと聞けど。訓練などでなんとなく普通じゃないというのはわかるんだが、それでも常識の範囲内で休憩時間や訓練内容が決まっているから、わかりづらい。あとは突発的な事故でそうとわかる例もある」

「突発的な事故?」

「……俺の場合は十二の時、刺客を返り討ちにした。その時の状況がまともじゃなかったんだな。

カイナンの『強欲王』も似たような状況だったらしいぞ」

自国を滅ぼした『狂王』の孫ということで、マティサは“加護持ち”らしいとわかってから警戒されていた。

そして十二の時、国内の者が国外の者かはいまだに謎だが、刺客を送り込まれた。マティサの渾身の一撃で、刺客の腹には大穴が空いた。吹き飛んだ刺客の体が壁にめり込んだ時、マティサは自身の力に戦慄したものだ。

ゲイン王もまた刺客を差し向けられて返り討ちにし、自らの力を自覚したと言われている。刺客を送ったのは仲の悪かった父王らしいが、どこまで本当かはわからない。

「まあ、俺みたいに昔っからわかってた例は少ねえよな」

『虐殺人形』ナリスを父に、『ハヤサの鬼姫』オクタヴィアを母に持つトウザは、幼少の頃から“加護持ち”だとわかっていた稀少な例である。

「ちなみにトウザ殿下はどうやって?」

ミリアーナの問いかけに、トウザはあっさりと答えた。

「下の弟のゴンザが生まれたあとだったから、五つか六つん時だな。なんかの宴で『両親が“加護持ち”なら、子供らもそうかもしれない』って親戚連中が盛り上がったよ」

総領娘のオクタヴィアのもとにナリスが婿入りし、一年でトウザが生まれた。それから二年後に長女タヴィナ、その翌年に次男センザ、さらに二年後には三男ゴンザが誕生し、立て続けの出産でハヤサは喜びに沸いた。

直系に王級“加護持ち”がいれば、“加護持ち”の生まれる可能性が上がる。まして両親とも王級“加護持ち”だったので、期待も大きかったのだ。

「親父が『あの木でも抜ければそうじゃろう』って、庭の大木を指してよ。余興で俺がこう、掴んで持ち上げようとしたら、ずぼっと——」

「抜けたんですか!」

ミリアーナが驚愕すると、トウザは豪快に笑った。

「おお。大人でも手がまわらんぐらいでつかい木だったんだが、根っこから抜けたぞ。それで親父が俺を『王級』だと認定した。おかげで我が家の恒例行事になって弟妹たちも試したんだが、俺以

外は誰も引っこ抜けなかったな」

トウザには五人の弟妹がいるが、全員「加護持ち」ではないとされている。それが判明したのは、この判定方法のおかげだった。

小さな子供が大木を引っこ抜くなどという非常識は、「加護持ち」ならではだろう。確かに、それはわかりやすい。

「なるほど。その方法でしたら、自分も早くにわかっていたかもしれないな。このキリム、陛下の血を引いておるので、その可能性も考えるべきでございました」

ぼんつとキリムが手を打った。キリムの言葉に、マティサが続ける。

「まあ、わかっただろうが……それは腕力に「加護」を持つ者だけだぞ。それ以外の「加護」はわからん」

世の中にはいろいろな「加護」を持つ者がいる。セイのように速さや跳躍力だけに加護を持つ者なら、ハヤサの方式では識別できない。トウザにしろ、加護は腕力だけではなかった。

「まあ、できないという先入観のせいで、なかなか判明しないのが現状だ」
マティサは、そう締めくくった。

外から判別するのは不可能なのが「加護持ち」だ。

「それじゃあ、「加護持ち」の自覚がないまま一生を終える人もいるんじゃないですか？」

ミリアーナの問いに、マティサは複雑そうな表情を浮かべる。

「ああ。能力の傾向によっては、王級でもまったく自覚できない場合もあるだろうな」

「なんで私を見るんですか？」

「……気にするな」

世の中には、無自覚の「加護持ち」がいるのだ。

「キリム君は初陣がすむまで、ゲイン王様の子供だつて名乗りでなかったんでしょ？ それまでどうして名乗りでなかったの？」

キリム・ナダはゲイン王の子であることは認められたが、それまで王は彼の存在を知らなかったらしい。

ミリアーナが首をかしげると、キリムは難しい顔をした。

「それは少々、仔細がございまして——」

言葉を濁すキリムを見て、マティサが言う。

「無茶を言うな、嫁。名乗りでも、証明できなければ騙りとして処罰されかねん。正式に召し上げられた者ならともかく、そうでなければ真実であったとしても、場合によっては汚名を着せられることもあるんだぞ」

正式に愛妾として王宮に上がった者、または後宮に囲われている者の子ならともかく、落胤である以上、王の子だと言い張っても信じてもらえない可能性が高い。悪くすれば、政治的な判断で認めない時もある。子供の親族や後盾が権力を渡したくない相手である場合、庶子を犠牲にしてしまうのだ。

「ああ、王族を騙った者は、一族郎党死罪だろうが。よほど確実に証明できるものがなければ、あ、

黙っていることのほうが多いんだぜ？」

トウザがマティサのあとに続けると、キリムは頷いた。

「母は正式な愛妾でもなく、ただ一夜、お忍びの陛下の枕席に侍っただけの者でありましたので、自分を生んだあと——」

ミリアーナは、キリムの言葉が終わらないうちに口を開く。

「亡くなったの！」

「死んでおりませぬ！ 身分のつりあう、遠方の者に嫁ぎました！」

キリムの生母は、政争に巻き込まれることも、後宮で王の寵を競うことも嫌い、泣く泣くキリムを手放した。そして、すべてを承知しながらそれでもいいと言ってくれた、辺境の下級貴族に嫁いだのだ。

「会ったことはございませぬが、父の違う弟と妹がいるそうでございます。辺境にて平穩にお過ごしとか」

キリムを生んだことが知れたのちも、自分は他の者に嫁いだ身で、陛下にお目通り叶う者ではないと、辺境にて暮らしているらしい。

「そこまで聞くと、逆に名乗りでたのが不思議だわ。何があったの？」

「従兄上——伯父上の嫡男にすすめられたのです」

キリムは伯父に育てられた。伯父の子である従兄弟たちは、本当の兄弟のようにキリムに接していたという。

「あれは初陣をすませた日のことでございます。自分、陛下に呼ばれました。昼間の働きにて、お目にとまったとの由にございましたが、従兄上が慌てまして。何やら『名乗るには今しかない、今名乗りでなければ、必ず後悔する』と申されました。陛下と二人きりになるはずであるから、その時すかさず名乗りでよと」

この時、キリム以外の全員が状況を理解した。

キリムは知らないようだが、夜に天幕に呼びつけることには特別な意味がある。すなわち、夜伽をしるということだ。

「信じていただけるかどうか、わかりませなんだが——陛下は自分の言葉を信じてくださいました。あれほど嬉しかったことはございませぬ。庶子として認めるのは様々な問題がございますが、それを排してのこと。認められぬでも、陛下のお役に立とうと思っております。子と認められたからには、いっそうの孝心を持つて尽くす所存にございます」

一点の曇りもない笑顔で言うキリムを見て、ミリアーナは熱くなった目頭を押さえた。

「キリム君……」

キリムの従兄が慌てるのも当然だ。彼は、どういう意図でゲインがキリムに目をつけたのかわかったのだろう。本人は、いまだにまったく気づいていないようだが。

証明できるかどうかなど、関係ない。一か八か親子であることを明かせば、いくらゲインでも手を出さないと考え、従兄はキリムに言いつけたのだろう。キリムを守るために。

それは英断だった。

もしキリムが従兄の進言を受けず、親子の名乗りを上げなければ——キリムは二重の禁断の扉を開いていたに違いない。
よくやった。

その場にいたキリム以外の全員が、名も知らぬキリムの従兄を心の中で褒めたたえた。

真実は時として残酷だ。キリムのためにも、そのことは一生秘密にしておこう——ミリアーナはそう心に固く誓った。

ふと、トウザはミリアーナの食べているものに目をやった。

「なんですか？」

「いや。それ、ハシミか？」

ミリアーナは首をかしげる。

「はしみってなんですか？」

ミリアーナが口にしていたのは、青菜のお浸しである。茹でた青菜に、小皿の醤油をつけて食べていた。

「その、小皿に入っているやつだ」

「これですか？」

ミリアーナは別の小皿に醤油を入れて、トウザに差し出した。

トウザは指の先につけて舐める。

「ちよつと違うな。ハシミはもうちよい生臭い。けど、近いぜ。なんだ、こりゃあ？」

ミリアーナは、ぐつと身を乗り出す。

「トウザ殿下、もしかしてそれ、小魚に塩をまぶして常温で発酵させた調味料じゃないですか？」

「なんだ、作り方まで知ってるのか？ おう、そうだぜ」

ジュリアスは目を瞬かせる。

「それは塩漬けではないのですか？」

「いや、魚の塩漬けとはちよつと違うんだよ。汁の調味料だ。ハシミはハヤサ独特の調味料だが、似たようなもんは海辺の町によくあるぜ」

「魚醬だわ……魚醬がこの世界にも……」

ミリアーナは拳を握った。

オウミに海はない。そのため気づかなかつたが、常温で作れる魚醬が何かの拍子でこの世界に生まれていても不思議ではない。塩漬けにしておいた小魚が発酵すればいいのだ。

「もしかして、ハヤサには生の魚を食べる文化とか、あったりします？」

「よく知ってるな。あるぜ。とれたての魚を小さく切つて、魚醬につけて食ったりする。けどよ、魚が新鮮じゃねえとできねえ食い方なんで、陸のほうじゃしねえなあ」

「お刺身……お刺身だわ」

ミリアーナはハヤサの食文化に感動した。

41 ダイテス領攻防記3

(もしかしたら、私では見つけられなかったお米も、この世界のどこかにあるかもしれない)

「それよりお嬢ちゃん、これなんだ？ ハシミじゃねえようだが、味が近い。俺の知ってるものより癖がねえ。オウミにはよく来るんだが、こいつは知らなかったぜ」

ミリアーナはにっこり笑って答えた。

「ダイテス独特の調味料ですわ。原料は秘密ですけど、魚ではありませんの。お気に召したのであれば、融通いたしますわ」

ダイテスの醤油の原料は、大豆と小麦だ。

醤油の誕生には諸説ある。そのうちのひとつは、味噌を作った時に偶然できたという説だ。味噌の底に溜まる液体、つまり醤油が発祥だとするもので、その後、小麦も加えられるようになり、自然に溜まるのを待つのでなく、もろみの段階で压榨するようになった。

ダイテスの醤油は、日本の製法を踏襲している。

「お？ そんなら頼むわ。土産にしてみよ。癖がないから、なんにでも合いそうだな」

「トウザ殿下、ハヤサは貿易が盛んなのでしたわよね」

「おお。なんか取り寄せてほしいものでもあんのか？ 相談に乗るぜ」

ミリアーナは目を輝かせた。

この時代の人間は、あまり遠出をしない。小さな村出身の人間が、自分の村と近隣の村しか知らずに一生を終えることもめずらしくないのだ。

その点、貿易が盛んなハヤサはそうではない。時に帆船は、陸を移動する隊商よりもはるか遠く

まで移動できる。その行動範囲は、ミリアーナの情報網をゆうに超えるはずだ。

「穀物の一種なんですけど、私を知るものとは名前が違うかもしれないわ。水を張った畑――

田んぼで栽培するものなんですけど――」

「そいつはマイじゃねえか？」

「あるんですか！」

トウザのこぼした言葉にミリアーナは反応した。

「あ、ああ。あなたの知ってるもんとは違うかもしれないが、水を張った畑で栽培するなんていう特徴のあるものは、あれじゃねえかと思う。ハヤサにあるもんじゃねえぜ。取引のある島国で主食になっている穀物は、水の張った畑で栽培するんだ。煮るっていうか、あつちじゃ炊くって言うんだけどな、そうして食うもんだぜ」

米だ。それもジャポニカ種に近いものらしい。

「それっ、手に入りますか？ できれば種籾――種も！」

「お、おう。時間はかかるが、できるぜ」

ミリアーナの剣幕に、トウザは少々引き気味に答えた。

「お願いします！ 時間がかかっても、確実に手に入るなら構いませんわ！ お金がいくらかかっても構いませんからっ！」

「おう。任せとけ。今年中には手に入れてやる。けどよ、種籾ってこたあ、栽培すんのかい？ 俺は栽培方法までは知らんぞ？」

トウザは頭を掻く。

「それが私の知っているものなら、栽培方法はわかりますわ」

ミリアーナは嬉しくなる。

醤油と味噌は作れた。風呂にも毎日入れるようになった。しかし最後のひとつ——米だけは、今まで手に入れることができなかったのだ。

米と味噌、醤油、風呂があれば、日本人は生きていける。

「嬉しそうだな、嫁」

「婿様、私、今日ほど婿様が来てくれてよかったと思っただけではありませんわ」

なんてすばらしい伝手、とミリアーナは笑みを浮かべる。

「……そいつはよかったな」

マティサは微妙な顔をした。

（ああ、ハヤサともっと近ければ……というか、直通の線路を引いてしまいたい。冷凍保存技術を伝えて直通の汽車を走らせたら、新鮮な魚介類も手に入るのに！ それより海の幸が豊富なハヤサなら、日本の食文化を再現できそう。鰹節とか……少なくとも干物はあるかも）

ミリアーナは本気でハヤサとの交易を考えた。

「トウザ殿下、ハヤサは新しい事業を開拓する気はありませんか？」

「待て！ 何をする気だ、嫁！」

マティサはミリアーナを抱きすくめて口をふさいだ。声をひそめ、耳元で説教をする。

「ダイテスの技術を漏えいするつもりか？ 何を血迷っている」

ミリアーナも小声で言い返した。

「だって、ハヤサって海洋国でしょう？ 『行くこともできない遠い異国』のものを再現できる可能性が高いんですよ」

条件だけでなく、貿易が盛んなハヤサなら、辺境であるダイテスよりもいろいろな物資が手に入る。

「気持ちわかるが、技術の流出は困る。貿易だけにしろ。それなら許す」

「うー、ハヤサでないと意味がないですう」

小声でぼそぼそ言い合いながら、ミリアーナとマティサは条件をすり合わせていた。

「あの、兄上」

真つ赤な顔をしたジュリアスがマティサに声をかける。

「何か？」

マティサが目を向けると、ジュリアスは下を向いてしまった。

隣では、キリムがやはり赤い顔をして横を向いている。

「仲がいいな、お前ら」

呆れたようにトウザが言う。

「あ……」

端から見れば、マティサが突然ミリアーナを抱きすくめ、戯れていたようにしか見えなかった。

マティサはミリアーナから手を離す。

「婿様、ひどい」

「誤解を招く言い方をするな」

ミリアーナが言っているのは技術の流出の禁止についてだが、知らなければ、マティサがミリアーナを弄もてんだようにしか見えない。

「お前が人目もはばからず、いちゃいちゃする質たちだとは知らなかったぜ」

「……」

トウザの言葉にそれは違うと言いつ返し返したかったマティサだが、ミリアーナとの会話を知られるわけにはいかなかったたので、何も言いつ返し返せなかった。

あたりには微妙な空気が漂たなびう。

「あ、あの……」

場の空気を変えたいジュリアスは、必死に話題を振った。

「ダイテスの技術は素晴らしいですね。あんなに手軽に湯あみができるとは、驚きです」

「さよう、自分もあれには驚きました。あれはなんでございますか？」

「……」

キリムもジュリアスの話に乗ってきたが——技術の話はしてほしくないマティサだった。

「あれは、水道と湯沸ゆわかし器ですわ。ダイテス特有の技術ですの」

にっこりと笑いながらミリアーナが答える。

「あの自動車といい、ダイテスにはいろんなものがあるな。あんなもの、はじめて見たぜ」

トウザも話に加わった。

「あれは『行くこともできない遠い異国』の知識をもとに、精霊石を使用して作った魔法道具ですわ。湯沸かし器も水道も、一部に精霊石を使っていますの。精霊石ありきで開発されているものですから、精霊石が豊富なダイテスならともかく、それ以外の場所では維持も困難かもしれません」

一部は完全機械式だとか、精霊石で賄まかなっている部分は別のものでも代用可能だとかいう事実は、もちろん極秘である。

「それとは……秘密にするのも当然か。ここまで便利なもんは、いったん使いはじめたら手放せねえが——ダイテスの専売になっちまう。維持にもダイテスを頼らなきゃならないとしたら、ダイテスの力が強くなりすぎる」

トウザが唸うなった。

「えっと？ どういうことでございましょう？」

首をひねるキリムに、ジュリアスがこっそり教えた。

「ダイテス以外では作れないので、販売するとしたら巨きよ万の富を生み出します。さらに維持するにもダイテスに依存しなければならぬので、購入者たちはダイテスの機嫌を損ねよう努つとめるでしょう。つまり、ダイテスの影響力が強くなりすぎるということですよ」

「おお、そういうことですか」

ぼんつとキリムが手を打った。

「ご理解いただけ嬉しですわ」

「ダイテスの技術は便利すぎてな、おかげでダイテスから出たくなくなる」
マティサがそうこぼすと、ミリアーナは首をかしげる。

「そうなんですか？」

「嫁、ダイテスの暮らしに慣れると、王宮の暮らしでさえ不便を感じるぞ。ダイテス以外の暮らしが苦痛になる。困ったことだ」

「あらまあ」

ダイテスの技術は、当分秘匿しておいたほうが無難なようである。

ダイテスが勢力を持てば、王宮のほうでダイテスを気にするようになる。場合によっては危険視されてしまうだろう。

もともとマティサ自身が危険視されているのだ。さらなる注目はいらぬ。

ある程度食べて人心地ついたマティサは、切り出した。

「これからのことですが、王太子殿下とキリム殿には、秘密裏に王宮に戻っていただきます。このマティサもそうですが、我々は昨夜から王宮にいた——そういうことにしていただきたい」

事は非常に微妙だ。

宴の真つ最中に、王宮のど真ん中から客人と重要人物である王太子を攫われた。それは、オウミの警備の甘さを宣伝するようなものだ。他国に知られば、オウミの威信は地に落ちる。

さらにはランカナの宰相によるジュリアスへの無体と、キレた王級「加護持ち」二人によるニーレン城の破壊。

これを認めるわけにはいかないのである。

「昨夜のことは他言無用。よろしいかな？ キリム殿」

「は。自分は昨晩からオウミの王城にいたのですな。わかり申した」

びしつとキリムが返答する。

「爺にはそのように話を通っているのでございましょう。ならばそのように」

「ものわかりがよくて何よりだ」

「ですが、我が父である陛下には、ある程度のご報告せねばなりません。さもなければ、ランカナの口車でこちらが悪役に仕立てられるやもしれませぬので。公にはいたしませぬ。できることでもありませぬが……話を通さねば、我がカイナンの動向が決まりませぬ」

「それは仕方ないでしょうな」

本来ならカイナンにも知られたくはないが——キリム・ナダが絡む以上、仕方ないことであった。一晩のうちに城ひとつが破壊されたことに、王級「加護持ち」がかかわっていると察知する者はいらぬだろうが——特定されなければいいことだ。

ニーレン城崩壊とは無関係。知らぬ、存せぬで押し通す。

「ランカナも要人の拉致をしたなどと公表できぬでしょうが、城を何者かに破壊された、というのは隠しようのないことです。それをこの『戦神の寵児』とこじつけることはあるでしょうな」

キリムも頷く。

「さよう。我が国の陛下が、そのような言いがかりを信じてはなりません。このキリム、とくと真実を伝えねば」

欺瞞に満ちた口裏合わせだが、真実を公表できないのであれば、それなりに落としどころをつけておかなければならない。

「我が国の宴に刺客を放つておいて、あつかましい。キリム殿のおかげで事なきを得ましたが、王太子殿下の命にかかわるところでした。秘密にしておいたほうがいいでしょうが、必要とあれば公表しても構いません」

「はあ!? しかし、このキリム、あの場では不覚を取り——」

マティサは手を上げて、キリムの言葉をさえぎった。

「キリム殿が不覚を取っていれば、我が国の王太子殿下はどうなっていたことか。よいですか？ ランカナの刺客は、キリム殿が退けた。ジュリアス殿下はキリム殿に感謝しております。それゆえ王宮に滞在することとなった——そういうことです」

ミリアーナはこっそりコシスに聞いた。

「あれって、攫ったことはなかったことにしてやるが、ニーレン城破壊も認めてやらない。難癖つけるなら、刺客を放つたことにしてやるってことよね？」

「妥当な線だと思われませんが？ ランカナが曲者を宴に紛れ込ませたことは事実です」

それが拉致目的なのか、暗殺目的なのかという違いだけだ。キリムが不覚を取ったためジュリア

スは攫われたが、そうでなければありえた事態だ。

「婿様、黒い♪」

納得がいかないのか、キリムは唸っていた。

武人として、ない功績があったと偽証するのが嫌なのだろう。しかし、攫われた事実をないものにしたいのなら、キリムが不覚を取ったこともなかったことにしなければならぬ。

「心苦しくはありますが……こ、これも方便と思わねばなりません……」

「そのようにお願いします」

ここで、話がついた。

「では、殿下とキリム殿は王宮に。抜け道を通りますが、キリム殿は——」

「うちの密偵に頼めばいいわ」

「嫁？ ああ、認識攪乱か」

密かに王宮へ戻るには、表門からは入れない。しかし、王宮の抜け道を外国の人間に知られるわけにもいかない。ジュリアスはともかく、キリムには入口を見られないようにする必要があった。幸いダイテスにはカズルがいる。

カズルの認識攪乱の魔法を使えば、下手な目隠しより有効である。

「確かにあれなら確実だな」

マティサも、ニーレンでカズルの術の恩恵にあずかっている。

マティサは傍らのコシスに声をかけた。